

魚介類の産卵・成育場所となり、「海の掃り籠」とも称されるアマモ場の再生をテーマにした「全国アマモサミット2016 in 備前」(実行委主催)が6月3日から3日間、備前市日生町地区で開催される。全国から自然保護団体関係者や研究者ら延べ約900人が参加予定。海の環境保全に向け、先進地である日生町地区の取り組みがあらためて注目を集めそうだ。(岸俊行)

来月、備前で全国サミット

県内有数の漁場として知られる日生町地区の沖合には、1940年代に590畝のアマモ場があったが、水質悪化などで85年には12畝まで減少。漁獲量も減り、稚魚の放流を行っても思うほどの効果は得られなかったという。

危機感を強めた日生町漁協(同市日生町日生)が、前例のないアマモ場の復活作戦に乗り出したのは85年。県や県水産試験場の力を借り、アマモから採取した種を船上からまく方法で、漁協組合員らは毎年200万〜400万粒を海に返した。

カキ殻を散布

当初はさほど効果が上がらず、原因として浮かび上がったのが、海底の状態だ。

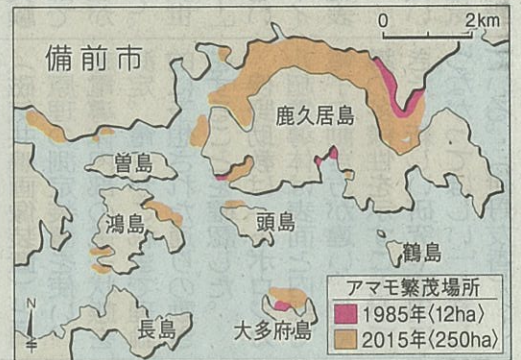
試行錯誤を続けるうち、底質が泥場のためにアマモが定着しにくいことが判明。種と合わせてカキ殻をまくことによって改善を図った。2008年ごろからは成果が見え始め、現在アマモ場は250畝まで回復している。

アマモ再生 先進事例発信



10年には猛暑の影響で養殖カキの水揚げ減少が懸念されたというが、「反対に豊漁となった」と日生町漁協の淵本重廣組合長。「アマモ場が拡大したことで、高温でもカキが生存できる酸素量を確保できたためと考えられる」と指摘し、「ここ数年は稚魚も増えてきた」と手応えを語る。

同漁協は12年、県やNPO法人・里海づくり研究会、生活協同組合おかやまコープとアマモ場再生活動に関する連携協定を締結。13年からは、地元の日生中生徒も



海に漂うアマモを回収して種を採る作業を手伝う。地域や団体を巻き込んだ活動となり、県内では瀬戸内市や笠岡市にも広がりをみせている。

ノウハウ共有

サミットは、海の自然を再生する方策として、アマモ場の重要性

講演やパネル討論 日生町漁協の活動に光

全国アマモサミットの主な日程

- 【3日】沿岸環境関連学会連絡協議会ジョイントシンポジウム(日生町漁協、午前9時半〜午後5時半)
- 【4日】全国アマモサミット(日生市民会館、午前9時半〜午後5時)＝第1部「アマモ場再生活動30年の歩み」、日生中生徒による演劇▽第2部「アマモ場再生への道」▽第3部「里海・里山ブランドの発信」
- 【5日】海辺の自然再生・高校生サミット(日生市民会館、午前9時〜午後0時10分)▽クローゼット(同、午後0時10分〜0時30分)

に理解を広げる目的。08年の横浜市を皮切りに全国各地で開かれている。9回目となる今回は、再生活動発祥の地とされる日生が選ばれた。

参加者は講演やパネル討論を通じて、日生町漁協の30年以上に及ぶ活動に光を当て、アマモ場の再生技術などを考える。日生中3年生は、漁協組合員の奮闘を紹介する劇を上演する予定だ。

サミット実行委員長を務める里海づくり研究会の田中文裕理事・事務局長は「日生では苦労と工夫を重ねた結果、豊かな海を取り戻しつつある。そのノウハウを、全国で保護に携わる人たちと共有できる場になれば」と期待している。

種を採取するため、海に漂うアマモを回収する日生中生徒＝2015年6月